

● シリーズ 私の見た日本 Vol.186

The Future Traditions

BARNA Gergely Péter (バルナ ゲルガイ ペーター)

ハンガリー・ブダペスト出身。2013年京都工芸繊維大学修士課程修了、2018年同大学造形化学博士課程修了。同年3Dプリンター技術開発のネオマテリア株式会社入社、2019年退社。2019年12月から京都工芸繊維大学のKYOTO Design LabでDesign Researcher in Residenceとして伝統建築とデジタル先端技術の可能性を研究。2011年から「土間の家」の代表



母が人の密集している都会から離れたくて、15歳のときに家族で田舎へ引っ越した。そこで古い民家を購入して、改修しながら住み始めた。小さい頃からものづくりが好きだったけれど、それまで街での暮らししか知らなかった私にとって、みずから手で空間を築く職人たちに出会った経験が人生を変えた。「俺も職人になるぞ!」と燃えて、時間が許さざり彼らの下で作業を手伝った。

高校を卒業した後、大学には進学せずに、まずは手仕事を覚えることにした。ドイツの楽器アーティスト、Manfred Bleffert (マンフレッド・ブレフェルト) の工房で2年間働き、ハンガリーに戻り、同じぐらいの期間、Ferenc Koller (フェレンツ・コラー) のインテリア・デザイン工房で職人の見習いをした。彼らに教わったのは、人間がつくり出すすべての有形のものは、ただの器のような空の形ではなく、創造者の思想や感情、創案を実現させる際に直面するあらゆる問題に対する解決方法などの無形の内容を、有形の形にこしらえたものである、ということだ。振り返えてみると、この時期、特に何らかの技を覚えようとしたわけではなく、ものづくりに対する理論や哲学、デザイナーとしての生き方を学ぼうとしていたように思う。

このドイツのマイスター見習いのように生活していた数年、余裕があるかぎり世界各地に旅をしていた。日本のことはあまり知らなかったが、家族で付き合いのあった日本人の友人に招かれ、2004年に関東を中心に訪ねる機会があった。高校は芸術に強いシュタイナー・スクールに通っていたので、その頃から木工の経験があったものの、日本の伝統的な大工技術にじかに触れると、未知の世界に出会ったような感動を覚えた。特に、川崎市立日本民家園の「作田家住宅」の木材の活かし方の素晴らしさが心に響いて、昔の田舎の人の素材の特徴を深く理解し、その癖を活かした素朴ながらも美しい知恵にとっても驚かされた。

日本の伝統建築への憧れは、ハンガリーに戻ってもやむことはなかった。国際交流基金ブダペスト日本文化センターの図書館で、法隆寺の宮大工棟梁・西岡常一の『木のいのち木のこころ』という本を借りて読みふけた。彼の仕事、人間や素材に対する言葉に、私が若い頃から追求してきた思想が鏡に写っているかのように感じられ、日本で建築を勉強して、大工のことを学が決心をした。そのため、大工たちとの交流に不可欠な日本語を勉強し、留学の準備を始めた。

文科省の奨学金制度に合格して、2010年の春からまずは研究生、それから修士を経て、博士課程を修了するまでの8年間、京都工芸繊維大学で勉強に励んだ。在学中多くの実測調査に参加し、日向進、石田潤一郎、清水重敦、各先生の指導の下で日本各地の建築文化を知ることができた。研究では、幕末・明治期に海外へ渡った日本建築模型の分析を通して、当時の建築の見方について調べた。きっかけは、明治6年ウィーン万国博覧会に出品された巨大な大名屋敷模型がウィーン世界博物館の倉庫で再発見されたことにある。この模型の詳細い実測調査・復元試案に携わったことのほか、ヨーロッパ各地の民族博物館でさらに300個余りの模型の記録を取って、その成果を博士論文で取り上げた。

大学では学術的な研究を行う一方、元来の目的であった職人との交流には現場での体験が必要であったため、その機会を探し求めていた。来日してから半年も経たない頃、京都府教育庁指導部文化財保護課の属託大工、山口保広さんに出会うご縁に恵まれた。山口さんは若い頃、西岡常一の下で修業されたことがあり、伝統建築の手法はもちろん、建築史上の技術発達やその背景にある理論的な面についてもとても詳しくあった。

日本の大工技術には道具の手入れが肝心であることから、刃物の研ぎ方から教えてもらった。まだ道具を持っていなかったのに、

大学の木工房の鑿や鉋を次々と借りて、宮大工水準の厳しい指導の下でそれらを順番に直していった。山口さんはその当時、京都の名所、清水寺伽藍の重要文化財、子安の塔の解体修理に携わっておられ、私もその貴重な現場を訪ねて、室町時代の建物の部材の納など普段見ることのできないところや、傷んでいるところの修理を見学することができた。

山口さんは若い頃から詩や随筆を嗜み、仕事の経験を重ねてから論文を書いておられたので、仕事の休憩時間には建築や職人について数々の興味深いお話を伺えた。ある時、山口さんが「もし古の宮大工が今生きていたら、明石海峡大橋や東京スカイツリーのような超高層建物を建てているだろう」とおっしゃっていたことが、とても印象に残っている。この言葉を聞いて、伝統建築というのは、一般的に保存すべき過去の遺産としてしか捉えられていないが、当時の人にとっては先端技術であり、今の「伝統」においても現在の先端技術を使うべきではないかと考えるようになった。

修業を始めてから数カ月経った頃、それまで住んでいた大学の国際寮を満期退寮で出なければならず、友人2人と一緒に家を借りることになった。3人とも建築を勉強していたので、そのまま住める家より、共同空間を広くもった、改装してもいいような古い家を探していた。西陣の仁和学区に昔の織り屋を見つけた。もともと作業場として使われていたであろう広い土間がついていたので、「土間の家」という名をつけて、2011年の春から住み始めた。思ったよりも状態が悪く、改修は大変な作業量になったが、山口さんに教えてもらったことを存分に試し、練習する格好の場となった。化粧材の交換はもちろん、梁の補強、柱の根継や土壁の塗り替えも実践する機会があり、建物を部分的に解体したり、古い墨書を探したりする作業はまるで創建当時の職人と会話をするような気分だった。



①川崎市立日本民家園「作田家住宅」の木の特性を活かした梁組 ②博士論文で研究した明治初期の大名屋敷模型。修復の後、ウィーン世界博物館で展示中 ③法隆寺五重塔。創建当初の先端技術を使った建築 ④「土間の家」の住み始めた頃の姿。3人の創設者 ⑤称念寺の上棟式。大工チームの記念写真(奈良県文化財保存事務所 提供) ⑥価値が分からなくなって壊されてしまった京都の町家の一例。屋根の線の跡しか残っていない ⑦伝統技法とデジタル加工の可能性を探るための量産の実験的な修復プロジェクト。京都市京セラ美術館で展示中 (KYOTO Design Lab 提供) ⑧岐阜県岐阜市正法寺大仏殿と岐阜大仏の3Dスキャン調査で撮った点群データのビジュアライゼーション。先端技術によって建物と安置している仏像の全く新しい拜観が可能になる (KYOTO Design Lab 提供)

ちょうどこの頃家族も増えたので、修士の勉強や家の修理以外に活動する余裕はしばらくなかったが、2013年の秋にまた新たな運命に出会った。奈良県橿原市今井町の重要文化財、称念寺で本堂の解体修理が始まり、人手を探していた。建物は損傷が激しく、桁がギザギザに折れていて、横から電柱ぐらいの丸太で支えないといけなほど傾いていた。瓦下ろしの作業員の募集で面接に行った際、作業後に調査員をやってくれないかと声をかけられたのだが、「私はこの現場で大工をやりたいです!」と答えて、結局大学を卒業するまでの4年半の間、勉強やビザの労働条件が許す限り勤務することになった。

解体がちょうど始まったばかりのところに参加できたおかげで、軸部だけではなく、瓦や壁のもととの納まりを見たらうで、傷んでいるところの補修や交換せざるを得ないところの新規加工、再建に必要な部材の実測や計画にも携わることができた。経験のないことばかりだったが、日本各地から集まった専門の宮大工組織のなかにいたので、伝統木工技術についてたくさんの方を教えていただいたし、周りの職人の作業する姿を見て技を盗むこともできた。この数年間で木材を扱う実際の作業方法や各種の木材の特徴の見分け方のほか、詳細へのこだわり、段取りや仕事に対する責任についても学ぶことができたと思う。この現場の経験と大学での学術的な研究によって、日本建築を形だけではなく、

社会や文化的な関係、材料的な面など、中核のところまで含めて理解しようという視座を得ることができた。

ところが、この伝統職人の代々伝習してきた世界が消えつつある。ほとんどの近代建築は建築家が考えており、設計と施工は分かれ、現場での手作業も予算の関係で大幅に省略されている。電動加工技術の発展に伴い建設過程は便利になるかもしれないが、創造プロセスのなかでの人間の役割がどんどん薄れていくのではないだろうか。

そのように考える一方で、山口さんが伝統建築と先端技術の関係性に関しておっしゃっていたように、決してそうなることはないだろう。もしかしたら、ものをつくる目的を再考する必要があるだけのこともかもしれない。現在、先端技術は新しい建物をよりたくさん、より大きく、より早くつくるように使われているが、創造過程においてわれわれ人間との関係が失われていくと、内容のない器ばかりができるのではないかと。人間にとって内容(意味)がないものは、空になったプラスチック容器のように捨てられてしまう。自動化が優れているハウスメーカーの住宅のように世代ごとに建替えられるのが当たり前とされているかもしれないが、従来の家が持っていた価値がわからなくなって、京都の町家も相次いで衰退していく。世界中で話題になっている環境問題にもつながると思うが、新しいものの創生にあたっては、われわれに与えられ

た資源的、文化的、建築的なリソースのマネジメントを考えざるを得ない時代が来ている。

日本建築こそ木、石や土などの自然リソースを大切に、その特性を活かして、建築の有形的、無形的な部分を層として重ねる伝統がある。これに、先端技術の量的ではなく、質的な創生力に着目したアプローチを導入できると、昔から伝習されてきた木の文化を「再生」した形で未来へ伝えることができると思う。現在、職人と先端技術を扱うエンジニアとは教育上、実務上ともに分かれているが、未来の伝統建築を未来の職人が、質的な可能性を活かした3Dスキャン、機械学習に基づいた分析や、デジタル加工など、先端技術の道具で築くことが可能になるのではないかと。

日本に来たとき、伝統建築技術を修め、大工になろうとしていた。修業している間、この伝統と人間の創生プロセスでの役割を次世代へ伝えようとしたら、未来の技を考えざるを得ないということに気づいた。過去の伝統をそのまま保存しようとする立場からみて、この研究に関わることは本来の目的から外れているかのように思われるかもしれない。だが、革新は日本建築史上何度も起こっており、私はこれこそが伝統の本来のあり様だと信じている。